

# 音楽科部会

司会者 横山 淳子 (旭川市立日章小学校教諭)  
助言者 佐藤 正友 (旭川市教育委員会指導主事)  
小林 和俊 (旭川市立東光小学校校長)

## I 授業の部会から ※主なものを抜粋

### 音楽づくりについて

○楽器の種類や小節数、グループ形態などの条件づくりがしっかりとできていたため、活動がスムーズに進んでいた。音楽づくりは広がり過ぎると收拾がつかなくなる場合があるので、改めて条件づくりの重要性に気付かされた。

○どのように音楽づくりをするべきか。一番大切にしていることは何か。

→発達段階にもよるが、低学年では特に拍を大切にしている。拍の感覚が自然と身に付くように、常時活動にリズム打ちやリズムのリレーなどを取り入れ、実践している。その他にも様々な楽器と触れあって、音色を聴き合ったり、奏法を探ったりする活動を取り入れている。

→友達との学び合いから生まれる音楽や音のよさを感じさせることを大切にしている。条件を限定して、自分たちの力だけで作りあげる楽しさを味わったり、難しいという意識をもたずに自然と表現したりできる授業を目指している。

○音楽づくりではあるが、演奏技術によってしまい、児童に差ができてしまうように感じた。

### ホワイトボードの活用について

○ホワイトボードの使い方についてグループ毎に違いがあるように感じた。ウッドブロックをどちらから叩くか、役割などを細かく書き込んでいるグループ、そうでないグループがあったが、どのように指導していたのか。

→児童の思考を明確にしたり、児童同士の思いや意図を共有したりするためにホワイトボードと楽器毎のマグネットを用意した。楽譜を作成するためではなく、あくまでも自分たちが演奏しやすくなることを目的としているため、使い方は任せている。

○児童の「できること」「できないこと」を明確にし、教具を有効に活用して視覚的に分かりやすく指導していた。教師の押さえないところと、児童のやりたいことが繋がっていた。

○児童の考えや思いを共有するために楽譜を使うことは有効だが、他にも算数と結び付けたり、体の動きで共有したりするなど、得意なものと結び付ける方法もある。

### 演奏技能の習得について

○言葉と関連させて様々なリズムに親しませることで、指使いやタンギング等の技能習得に繋がっていた。

○「聴き合う活動」では、聴くことで気付いたことと、自分たちも演奏したから分かることがリンクし、生きた知識や技能に繋がっていた。共通事項とも繋がっていた。

○音楽には言葉だけでは表せないこともあるが、言葉で共有できることもある。児童の考えや感じ方の違いを取り上げ、共有することで、積み重ねられる知識や技能が見られた。

○3つのグループが交流することで、個の気付きを大切にできていた。

○リズムを楽器で演奏する場面では、技能の習得が必要になるので、その辺りも意識できるとよい。



## Ⅱ 助言者からの講評 ※要点のみ

### (1) 佐藤 正友 指導主事から

音楽づくりの授業において、楽譜の扱いについては様々な難しさがある。本時に見られたホワイトボードを使った実践は、児童の思考に沿っていてよい手立てとなっていた。整った楽譜を求めるのではなく、あくまでも児童の発想や思いが表せて、演奏に繋がる形が望ましい。音の形やイメージ、音の高低が視覚的に伝わりやすいように、例えば机を叩いた音は□で、トライアングルの響く音色は△のように「音で描く」ようにすることも実践していくと、発達段階に応じた楽譜が表せるようになる。そういった体験から、五線譜に繋げていくのがよい。



「音楽が好きだ」「音楽を聴きたい」「演奏したい」という心を育ててほしい。そのような児童の感性を育むためにも、学習指導要領にもある「共通事項」を支えとして、整理して膨らませる必要がある。音楽を形づくっている音や音色、要素の働きをしっかりと捉えた上で、自分のイメージや感情との関わりを考えることで、児童の感性はより豊かになるので、今後も実践を重ねてほしい。

「音楽づくり」と「器楽」の「技能」に関しては、一人一人の思いに寄り添った知識や技能を習得させる必要がある。また、音楽づくりに求められる「技能」には、音楽を構成させる技能や音を即興的に出す技能等があるので、「器楽」の部分と混同せずに指導してほしい。とはいえ、楽器から美しい音色が出ると児童は喜びを感じるだろうし、演奏に対しての自信にも繋がる体験となる。一音でもきれいな音が出せると実感する瞬間を大切に、楽器に触れ合わせてほしい。

### (2) 小林 和俊 校長から

毎時間の導入で積み重ねているリズム活動や歌唱で培った能力がよく表れていた。特にリズムのリレーは拍感が大切になってくるので、今回の授業に生かされていた。

児童の主体的な学びを促すために、グループ形態を工夫することは有効であったと感じた。各グループがリーダーとなる児童を中心に話し合ったり、様々な音を試したりしていた。ホワイトボードを使用することで、方向性をもって創作し、お互いの考えを共有したり確認したりできるのがよかった。音色にこだわって、様々な奏法を試したり、既習事項を基にグループの友達と音色を聴き合ったりすることで、自然と並び方にも意図をもっていった。繰り返し見たり、聴いたりして修正、比較ができるアイテムとして iPad はとても有効である。教師が録画して編集したものを児童がただ見るのではなく、題材を通して撮りためたものを自分たちの必要に応じて引き出し、自然に使いこなせていた。他グループとの交流後、自分たちのつくった音楽を再考する際には、他のグループの演奏から得たアイデアや奏法を自分たちの音楽に取り入れているグループもあったが、前時の自分たちの演奏を見直したり、本時で録音した自分たちの演奏を見直したりして、改善点を挙げているグループもあった。自分たちの必要なものを学ぶために、自ら行動したり選択したりする力が育っており、深い学びにつながる授業だった。また、そこには事前の準備、1単位時間の中にある活動や手立てに教師の意図が明確にあると感じた。

